

ペスタロッチャー教育賞 受賞者紹介

NPO 法人ワールド・フレンドシップ・センター

名誉理事長 ^{もり} ^{した} 森 下 ^{ひろむ} 弘 氏

ヒロシマ

森下 弘

あなたの目で
確かに見つめなさい

ここに あってはならないことが起こり
ここに今 とりかえしのつかないことが続き
ここにやがて みんなの亡びの兆しが
あらわれるかも知れない

片目で見ないで
腕や頭で見ないで

絶望に耐えている者の心で

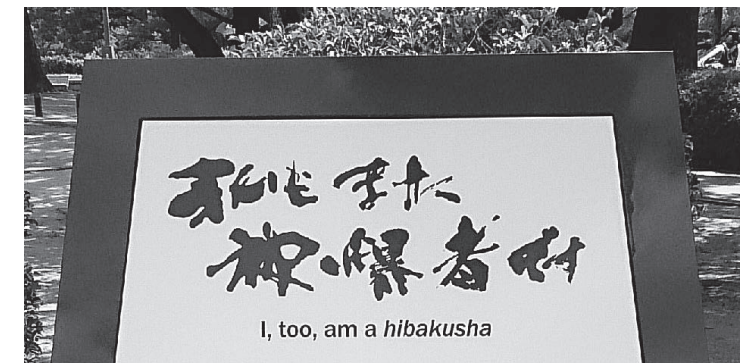
(森下弘ほか『銀杏の木への巡礼』ワールド・フレンドシップ・センター、1996年)

森下氏は1930年10月26日に広島県大崎上島町に生まれた。14歳のとき、建物疎開作業中に鶴見橋付近で被爆し、顔や手足に受けた傷痕に苦しむ。戦後、新制広島大学文学部を卒業後、高校教師として教壇に立つ。アメリカ人平和活動家・バーバラ・レイノルズ氏が1965年に創設したワールド・フレンドシップ・センター（2009年NPO 法人化）の理事長を2012年まで長く務め、現在は名誉理事長。30年勤めた廿日市高校を退職後は、島根大学、広島文教女子大学（現広島文教大学）で教授として指導を続けた。平和記念公園にあるレイノルズ氏の石碑「私もまた、被爆者です」の碑文を揮毫するなど書家として活動する傍ら、核兵器廃絶を目指す市民運動・平和教育に尽力。2024年4月には赤十字国際委員会（ICRC）に招かれ、ノルウェー・オスロを訪問した。

被爆体験で負った傷痕を長らく語る事のなかった森下氏の転機となったのは、1963年の長女誕生であった。生まれて

間もなくおっばいにしがみつく生命力に心を打たれるとともに、原爆で真っ黒こげになった幼児が思い起こされ、「もう二度と子どもたちにこんな体験をさせてはならない」という強い思いから証言活動をはじめる。「風の会」との出会いや原子力平和利用博覧会見学時の違和感などから問題意識を高めていた森下氏は、レイノルズ氏の企画する広島・長崎世界平和巡礼に参加。トルーマン元大統領との面会に立ち会うとともに、公民権運動に携わるアメリカの教師に、アメリカでは黒人問題について教科書の記述は少ないが、日本では、原爆や放射能の影響について、十分な記述がされているでしょうねと問われ、そう思うと答えた。しかし気になり、帰国後に確認したところ、記述は少なかった。高校生を対象とした原水爆意識調査も本格的に行い、平和教育の教材や副読本を作成したり、映画「ひろしま」を高校生とともに視聴したりするなど、精力的に子どもたちと対話を重ねてきた。90歳を超え、体力の衰えを感じる現在でも、何万点もの平和活動関連資料をもとに、国内外に情報を発信し続けている。

「広島を考えることは、平和に対して責任を取ることです。」広島平和記念資料館に展示されているローマ教皇ヨハネ・パウロ二世の碑文は、森下氏の揮毫によるものであり、何度も書き直して丁寧に仕上げられたという。ウクライナや中東での情勢が切迫する中、ノーベル平和賞を受賞した日本被団協や全国被爆教職員の会と志を同じくしながらも、高校教師として、残酷な光熱により絶命した子どもへの責任を重く受け止め、未来を担う子どもたちにどう生きるのかと問いかけ続けてこられた森下氏の姿は、革命の混乱に巻き込まれた子どもたちに手を差し伸べたペスタロッチャーの教育理念に沿うものであり、第33回ペスタロッチャー教育賞を贈呈し、その類まれな、優れた功績を顕彰したい。



バーバラ・レイノルズ氏記念碑